

八月踊りの継承に関する研究

小林暖加(お茶の水女子大学)

【研究背景・目的】

1950年から、日本では、無形の文化的所産で、歴史上、芸術上、学術上価値の高いものを、無形文化財として指定し保護するように取り組んでいる。また、2003年のユネスコ総会では「無形文化遺産の保護に関する条約」(無形文化遺産保護条約)が採択され、2004年に日本も締結している。この条約では、口承による伝統及び表現、芸能、社会的慣習、儀式及び祭礼行事、自然及び万物に関する知識及び慣習、伝統工芸技術といった無形文化遺産について、締約国が自国内で目録を作成し、保護措置をとること、また、国際的な保護として「人類の無形文化遺産代表的な一覧表」や「緊急に保護必要がある無形文化遺産の一覧表」を作成すること、国際的な援助を受けること、等が定められている。しかしながら、多くの無形文化遺産の継承は年々途絶えつつあるというのが現状である。さらに、東京文化財研究所(2020~2022)が公開する「伝統芸能における新型コロナウイルス禍の影響」によると、新型コロナウイルスの影響で活動の機会が減ったことが、継承をより困難にしたと分かる。筆者は、この現状を受けて、長く受け継がれてきたわざと携わってきた人の思いが途絶えてしまうことに対して問題意識を感じ、継承されるわざの減少傾向に歯止めをかけることは出来ないかと考えるようになった。

そのような中、筆者は奄美大島の佐仁集落で、2021年度から八月踊りの継承活動が開始されたことを知った。太鼓の音が聞こえれば駆けつけて踊る、アラセツやシバサシ(踊りが実施される期間)が近づくと踊りの話題で持ち切りになる(中原、1997)等、踊り好きの風習が今でも残る佐仁集落では、少子高齢化が進むものの、八月踊りを後世に繋げたいという住民の思いが強く、皆が積極的に継承活動に足を運んでいる。筆者は、佐仁集落で盛んに行われている継承活動に興味を持ち、その実態を調査することは、日本の無形文化財、とりわけ伝統舞踊を継承する上での課題とその解決策を導くことに繋がるのではないかと考えるに至った。

本研究では、八月踊りの継承活動を調査対象とし、伝統舞踊を継承する上で地域や学校が果たす役割、直面する課題、解決策について考察することを目的とする。

【研究方法】

① 文献調査

八月踊りの実施形態について記録した先行研

究や地域における文化財継承活動に関する先行研究を参考にする。

② 継承活動の観察記録

5月・8月・10月の計3回、佐仁集落に訪問し、佐仁公民館と佐仁小学校の2か所で開催される継承活動の様子を映像として記録する。さらに、継承活動の場において、親しい人々の集まりに加わりながら、八月踊りに関する発話内容を記録する。

③ インタビュー調査

佐仁集落の区長様、八月踊りの熟練者の皆様、佐仁小学校の先生方、佐仁小学校の子ども達を対象にインタビューを行う。

【研究結果】

文献研究の結果、「八月踊り」とは、年に一度シマ全体の祭祀として、家々を踊り巡る際に踊られる踊りのことで、歌唱部分は男性群と女性群が共通歌詞の中から即興的に歌詞を選択して歌う「歌掛け」から成り立ち、振付は佐仁集落に伝わる全23曲それぞれで異なることが分かった。かつての人々は生活の中で、頻繁に八月踊りに触れることでその複雑な奏演技術を習得してきたという。しかしながら、インタビュー調査の結果、現在、熟練者の数の減少、八月踊りの開催規模の縮小、地域行事で踊る機会や生活の中で歌う機会の激減等が、八月踊りに触れる機会を減少させ、技術の習得や八月踊りの継承を困難にしていることが確認できた。

その解決策として2021年より開始されたのが、継承活動である。そこでは、毎月3回、集落の公民館で、歌詞帳やCDを使用しながら歌掛けと踊りの練習が行われる。前半2回は若手のみで実施され、月の最後の活動では熟練者による指導が入る。観察記録とインタビュー調査から、継承活動が、人々の技術習得において効果を発揮していることが明らかになった。しかしながら、それと同時に、活動に参加する者の習得度合いに応じて、活動に臨む姿勢や求める活動内容のレベルが異なったり、歌詞帳やCDを使用して練習することで歌掛けの即興性が失われたりする等、いくつかの課題が生じていることも分かった。筆者はこれらの課題を踏まえて、八月踊りの継承をより円滑に行うための手がかりを、かつての八月踊りを取り巻く環境を参考にしながら、今後、考察したいと考える。発表時にはその詳細についても提示する。

参考文献：・無形文化遺産 | 文化庁

https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/mukei_bunka_isan/ (最終閲覧日：2023年7月20日) ・中原ゆかり(1997)『奄美の「シマの歌」』株式会社弘文堂